

## コナトゥスと変化

### — コナトゥス論への予備的考察 —

#### Conatus and Change

#### — a preliminary investigation for a study of conatus in Spinoza —

真田 郷史

#### 序 二つの同等性（問題の所在）

『エチカ』第4部序言の最後に、次のような表現が見られる。「各々の事物は、より多く完全であっても、より少なく完全であっても、それが存在し始めたのと同じの力をもって、常に存在に固執することが出来るであろう。従って、この点においては、すべての物が同等なのである」(II S.209)。ここに「存在に固執する力」と言われているものが、スピノザの所謂コナトゥスであることは、恐らく論を俟たないであろう。コナトゥスとは正に〈力〉の概念である。そのように考えてよいとするなら、ここに引用した表現の中に見られる二つの同等性、即ち、「同一の力」と言われている時のその同等性と、すべての物が「同等である」と言われている時のその同等性を、我々はどのように理解すべきであろうか。と言うのも、一つには、個物のコナトゥスを一つの〈力〉と見る時、それが常に「同一の力」に留まるとすれば、当の個物が現実世界の中で様々に変化し、極端な場合、消滅する直前にまで至ったとしても、なお、個物が自己の存在に固執する〈力〉は、何ら変化しないということになるのであろうか、またもう一つには、個物が自己の「存在に固執する力は制限されており、外部の原因の力によって無限に凌駕されている」とスピノザが語る時、明らかに〈力〉の大きさの比較といったことが前提されているように思われるが、それでは、コナトゥスに関して「すべての物が同等である」とするなら、個々の個物間には〈力〉の大きさの差異・比較といったことがあり得ないのであろう

か、冒頭に引用した記述を読む時、我々の中には、これらの疑問が直ちに起こって来るからである。

ここで、なるほど皮相的ではあるが、一つの可能な解釈を考えてみるならば、それは次のようなものとなるであろう。即ち、引用箇所所述べられている〈力〉をコナトゥスの表現であるとした上で、ここで問題となっているのは、コナトゥスの大きさや量のことではなく、むしろ、すべての個物がコナトゥスを持っているという事実そのもののこと、と見做すのである。確かに、各個物がそれぞれ己のコナトゥスを持っているという〈事実〉は、当の個物が存在し始めた時以来変わらぬこと、その意味で、当の個物は同じ一つのコナトゥスを持ち続けて来たわけであるし、また、この〈事実〉は、すべての個物において等しく考えられ得るので、その意味で、すべての個物は同等であると語られているかも知れない。

しかし、このような解釈を採るとしても、それは単に引用箇所の記述を読み易くするに留まり、我々に、スピノザの所謂コナトゥスの何であるかを、殆ど明らかにしてはくれない。さらに言えば、この記述の前半部分が、『エチカ』第3部定理8の証明を背景にしていることを考えるならば、ここに語られていることは、スピノザのコナトゥス論にとって、かなり重要な意味を持っているのではないかと、とも予想されるのである。因みに、『エチカ』第3部定理8では、コナトゥス概念が「限定された時間」を含まないことが述べられ、その証明において、次のような記述が見られる。「各々の物は、外部の原因によって滅ぼされなければ、それが現に存在している同じ能力をもって、常に存在し続けるのであるから、従って、この努力は無限定な時間を含んでいる」(II S.147)。ここに現れる「同じ能力」という表現が、先の引用箇所中のそれと、ほぼ等しい文脈の中で用いられていることは、誰の目にも明白であろう。従って、スピノザに拠れば、個物のコナトゥスは、当の個物が存在し始めた時から、現在を経て、さらに未定の将来に至るまで、いわば個物の存在と共に、すべての時間を通じて「同一の力」としてある、ということが語られていることになる。そして我々は、この「同一の力」ということが、文字通り、全く変化しない「同一の力」を意味しているのかどうか、もしそうだとするならば、コナトゥスに関して、一の〈力〉としてのその大きさとか変化といったものは、どのように理解され得るのか、そうした考察を通じて、スピノザの語るコナトゥスの内実を明らかにしなければならない。

実のところ、スピノザ哲学におけるコナトゥスの意味を明らかにするという

試みは、畢竟、スピノザ哲学における「本質と存在の関係」、「永遠と持続の関係」といった、非常に大きな主題をその問題背景としてのみ可能であるように思われる。それ故、コナトゥス論はスピノザ哲学の一つの要衝であって、また、スピノザ哲学を理解しようとする我々にとっては、非常に厳しい一つの試金石となるだろう。固より、我々は今、その試みの緒に就いたのであって、本稿において問題のすべてが解き明かされるわけではない。我々がここで目指しているのは、将来のコナトゥス論のための予備的考察として、スピノザの語るコナトゥス概念について、その基本的性格を素描することに留まるであろう。それを、冒頭に引用した箇所分析を通じて、暫く考えてみたいと思う。

さて、考察の手順として、先ずもって前半の問い、即ち、個物が自己の存在に固執しようと努める〈力〉が、汎時間的に「同一の力」と語られることの意味、を明らかにしたい。そのために、非常に単純な構造を持つものとしての一個の氷片と、これとは対照的に、非常に複雑な構造を持つものとしての一個の人間、という二種類の、時間的に変化する具体的な個物を例に取って、それぞれにおいて、一体、何が語られ得るかを見てみることにする。そうした具体的事例での検討から、次に、コナトゥス概念一般の基本的性格を抽出し、これによって先の問いに答えると同時に、後半の問い、即ち、あらゆる個物におけるコナトゥスの同等性ということの意味、の解明をも試みてみたいと思う。

## 1 氷片のコナトゥス

さて、次のように考えてみよう。今ここに、一片の氷があつて、かなり暖かい部屋の中のテーブルの上に、置かれているとする。勿論、この氷は我々の見ている前で、瞬く間に溶けて行き、やがては、テーブル上の小さな水溜まりになるだろう。氷から水へというこの単純な変化を、我々が考えるべき一つの事象として捉える時、その過程の中に我々は何を読み取ることが出来るだろうか。

先ず最初に確認しておきたいのは、現実到一个の氷片が存在した以上、そこに我々は、当の氷片のコナトゥスを問題にすることが出来る、ということである。この氷片のコナトゥスは、それ故、次のように表現出来る筈である。即ち、この氷片のコナトゥスとは、この氷片が「自己の存在に固執しようと努める能力ないし努力」(II S.146)である、と。なるほど、自己意識を持ち得ないと思

われる氷片に対して、「努める」あるいは「努力」といった表現（とりわけ日本語でのそうした表現）を用いることに、やはり、某かの違和感を覚えないうけでもない。しかし、この種の問題に我々は最早、頭を悩ませる必要はないであろう。ここでは、ただ次の二点だけを、確認しておこう。一つには、スピノザの語るコナトゥスという概念は、凡そ「存在する」と言われ得るすべての存在者に通有的な概念である、ということ。もう一つには、コナトゥスにおいて、これを意識するか否かは、コナトゥスそのものに何ら違いをもたらさない、ということである。話を進めよう。さて、問題の氷片のコナトゥスを、先程のように表現出来るものとして、それでは、当の氷片が自己の存在に固執する、言い換えれば、その氷片が正にその氷片のままであろうとするとは、一体、如何なる意味なのか。これが、問われるべき点である。

前に書いた論文の中で私は、コナトゥスは個物にとって、自己組織化の原理であると述べた。路傍の一個の石は、風雨等、外部の影響を一切、考慮に入れなければ、未来永劫にわたって、常に同じ一個の石であり続けるであろう。それは、その石の内部に自己否定的な契機が全く考えられない、という理由に拠るのであるが、より具体的に見れば、その石を構成している原子・分子・結晶相互間に絶えざる引力（凝集力）が働いていて、その石の自己崩壊を阻止している、とも言えるのである。スピノザが言うように、一個の個物を個物たらしめている規定、即ち、当の個物を構成している各要素が「すべて同時に、一結果の原因であるようなふうに、一つの活動において協同する」(II S.85) という事態が、正にこうした各要素間の結合に因るのだとしたら、コナトゥスとは、そうした結合を支える〈力〉として、いわば個物における「個体化の原理」とも見做し得るのである。何故なら、構成要素間にそうした結合の〈力〉が働いていなければ、当の個物は、自己の存在に固執するどころか、たちまち自己解体し、当の個物であることを止めるであろうからである。コナトゥスが一の〈力〉として積極的意味を持ち得るのは、先ず第一に、個物内部での自己組織化の〈力〉としてに他ならない。従って、氷片のコナトゥスも、先ずはそのようなものとして、考えることが出来るのではないか。

確かに、路傍の石と同様に、我々の氷片も、外部から何の〈力〉もこれに加えられなければ、常に同一の氷片であり続けるであろう。現実の氷片が、我々の眼前で瞬間に溶けて行くのは、氷片を取り巻いている部屋の空気から、不断に熱を与えられ続けているからに他ならない。この場合、熱もまた、外部から氷片に加えられる一つの〈力〉である。では、熱を与えられ溶けて行く氷片

のそうした変化過程において、当の氷片のコナトゥスは、いかなる意味を持つのであろうか。恐らく、一個の個物と見られる限りのこの氷片のコナトゥスは、小さなものであろう。それは、常に外部の原因の〈力〉によって凌駕されている。言い換えれば、氷片は、これを取り巻く空気の状態によって溶かされ、やがては、自己の存在を維持することが出来ずに、溶け切って水となり、一個の氷片としての己の存在を喪失する。しかし、その間、つまり氷片が氷片として存在する限り、この氷片は、周囲の空気をささやかながらも冷却することを通じて、自己の及ぶ限り、自己の存在に固執しようと努めるのである。この氷片のコナトゥスとは、そのようなものであろう。

以上の理解が正しいとするなら、我々はこの氷片のコナトゥスを、次のように考えていることになるのではないか。即ち、この氷片は、それがテーブルの上に置かれ、溶け始めてから（と言うのも、それ以前の氷片については、ここでは問わないから）、完全に溶け切って水に帰するまでの間、つまり、氷片が氷片であり続ける間、少なくとも一個の氷片としての存在を維持したのであり、その原因の少なくとも一つは、この氷片そのもののコナトゥスであると。一個の個物としてそこに置かれた氷片は、周囲の熱によって刻々と溶け続け、瞬時たりとも元のままの氷片であり続けることは出来ない。しかし、それにも関わらず、完全に溶け切ってしまうまでの間は、その氷片は、やはり最初の氷片と同一の氷片であり続けるのである。刻々と形状や大きさを変えながらも、常に同一の氷片であるということが可能にしているのが、正にこの氷片のコナトゥスなのである。何故なら、どんなに形を変え、どんなに小さくなくても、この氷片が一個の氷片であることには、変わりがないからである。氷が溶けて水になるという単純な変化過程において、我々は、その最中に氷が水でなくなる、例えば、氷が石になるといった、drastic な変化を考える余地はない。氷は、確かに一定時間、水であり続け、ついに、水であることを止めて、水になったのである。ならば、この氷片がこの氷片として存在し、この氷片であり続けることを可能にしたものこそ、正にこの氷片のコナトゥスと考えて良いのではないか。

実は、この議論は、スピノザ自身によって、既に、運動・変化における形相的本質の同一性として、彼の個体論の中に展開されているものである。その一つの定理は、次のように語っている。「もし個体を組織する各部分が、すべてその相互間の運動および静止の割合を以前のままに保つような関係において、より大きくあるいはより小さくなるならば、その個体もまた何ら形相を変えず

ことなく以前のままの本性を保持するであろう」(II S.100f.)。我々の氷片も、溶けて小さくなって行くのであるが、それが一個の氷片であるという、あるいは、もっと端的に、それが「氷」であるという形相的本質は、変わらないと考えることが出来る。それ故、ここで我々が考えている氷片のコナトゥスは、氷片が氷片である、あるいは、氷が氷である、という意味での、氷片の「氷性」という形相的本質に関わっていると言わざるを得ない。他方、氷から水へという変化過程において、この氷片が最初に持っていた形状や大きさは、この氷片の形相的本質である「氷性」にとっては、単なる偶有性以外の何物でもないという捉え方が、これに対置されよう。徐々に溶けて行く過程の中で、この氷片が「氷である」という自己の本性を喪失しない限り、それは依然として一個の氷片として存在し続けることになるのである。この氷片のコナトゥスは、そのような意味で、この氷片が自己の存在に固執しようと努める〈力〉なのである。

しかしながら、一個の氷片の本質たる「氷性」とは、そもそも、一体、何であるのか。勿論、それは、氷の何であるか、即ち、氷の定義に関わるのであるが、我々が初等物理学の知識に基づいて、物質としての氷の本性は水である(氷とは水の一様相に過ぎない)と語る時、あるいは、化学の用語を用いて、氷とは  $H_2O$  分子の集合体であると語る時、我々は氷の何を捉え、何について語っていることになるのであろうか。と言うのも、氷が溶けて水になったとしても、本来、水であったものが単にその存在様相を変えただけで、水(あるいは  $H_2O$  分子の集合体)であることは、何ら変わっていないとも考えられるからである。ならば、水 ( $H_2O$ ) という視点で見ると、固体か液体か気体かは、単なる様相的な差異に過ぎず、物質としてより本源的な水 ( $H_2O$ ) という存在の位相こそが、不変的なコナトゥスを語るに相応しい場であることになるのではないか、そのようにも考えられるからである。

しかし、この問いは、スピノザにおいては、些末なものに過ぎない。そして、この問いが些末なものであるということそれ自体は、スピノザにおいては、非常に重要なことのように思われる。と言うのも、先の問いは、一個の氷片に関して、より本源的な在り方を求めることを通して、水ないし  $H_2O$  分子という物質において、氷片の実体性を措定しようとするものだからである。しかし、こうした発想がスピノザの中にないことは、既に周知の通りである。スピノザにとって、氷であれ、水であれ、 $H_2O$  分子であれ、凡そ存在するすべての個物は、神という唯一の実体の様態に過ぎない。その意味において、氷も水も  $H_2O$  分子も、同等なのである。ある個物が氷であるか、水であるか、 $H_2O$  分子の

集合体であるかは、当の個物を我々が、どのような存在の位相において理解しているか、の違いに過ぎない。同じ一個の個物が、同時に氷でもあり、水でもあり、 $H_2O$  分子の集合体でもあるわけである。そして、これをいずれの位相において理解するにせよ、その個物が一個の様態であるということに、変わりはないのである。従って、我々が眼前の氷片を、正に氷片という位相において理解する時、我々はその氷片のコナトウスを、氷片の持つ「氷性」とも呼ぶべき本性との関連において、語る事が出来るであろう。他方、我々が、氷から水へ、さらに水から水蒸気へ、という変化を通じて不変な本性をそこに見る時、我々はこの対象を物質としての水（ないし  $H_2O$  分子の集合体）という位相で理解しているのであるから、そこではまた、「水（性）」という一定の本性を有した、物質としての水のコナトウスを考えることも、可能なのである。その際、物質としての水であることにとって、その存在様相が固体であるか、液体であるか、あるいは気体であるかは、なるほど、本質的なものではないことになる。それは、一個の氷片が氷であることにとって、その形状や大きさが本質的なものではなかったことと、等価なのである。それ故、一個の氷片を我々が氷片そのものとして捉える時、溶けて水になることによって、元の氷片は形相的に氷であることを止めるわけであって、その限りで当の氷片のコナトウスは、外部の原因の〈力〉によって完全に凌駕され、失われてしまった—— 一個の氷片のコナトウスというものを、我々はそのように考える事が出来るように思われる。

ここで、次の諸点について、今一度、確認しておこう。

(1) 我々の眼前にある氷片は、一個の様態に過ぎない。しかしそれは、水という個体的な実体の一存在様相としてではなく、神という唯一実体の様態としてなのである。スピノザにおいては、個体的実体というものは存在しない故に、物質としての水もまた、様態である。

(2) しかし、様態といえども、それが現実に存在する以上、そこには神の能力の様態的表現としての〈力〉が、即ち、コナトウスが内在しており、そのものの存在を維持している。従って、我々は眼前の氷片について、そのコナトウスを考える事が出来る。スピノザにおいては、存在とは〈力〉であり、様態はこの命題を個物において表現している。

(3) 氷片のコナトウスは、外部との熱交換といった変化過程の中で、氷片が氷片であり続けること、言い換えれば、氷片が己の形相的本質たる「氷性」を保持し続けることに関わっている。個物のコナトウスが「その物の与えられた

本質、即ち、現実的本質に他ならない」とされるのも、そのような意味で理解されるべきであろう。

## 2 人間のコナトゥス

次に、人間のコナトゥスについて、考えてみよう。先に一個の氷片について見て来たことが、ここでもまた、一個の人間について妥当するのであろうか。あるいは、無生物・無機質に過ぎない氷と、複雑な有機体・高度な知的生命体である人間との間のこの存在の距離が、コナトゥスそのものの意味に、如何なる差異を齎すことになるのであろうか。

先ず最初に明らかなことは、生物と無生物との間の差異に関してである。と言うのも、無生物である氷片は、ある特定の条件下においては、例えば、冷凍室の中では、そのまま殆ど半永久的に自己の存在を維持し得るのであろうが、生物は一般に、どのような好条件の環境にあっても、ただそれだけで自己の存在を維持することは、不可能だからである。当然のことながら、栄養物の摂取・消化・吸収といった活動が、生命の維持には欠かせないからである。このように見るなら、生命活動の有無という点で、両者は明らかにその存在様式を異にしている、と考えざるを得ないであろう。しかしながら、生命の有無を巡る存在の差異は、コナトゥス論の文脈において、果たしてどの程度、本質的な意味を持ち得るのであろうか。

この問題を考えるに当たって、我々は、スピノザにおける「生命」の意味について、ひいては存在するすべての物が、延長の様態であると同時にまた思惟の様態でもある、ということの意味について、再考すべきかも知れない。しかしここでは、この問題に関して、ただ次の点を確認しておくだけに留めておこう。即ち、本稿の冒頭でも触れたように、スピノザにおいてコナトゥスは、凡そ存在すると言われ得るすべての物に通有的な概念であって、その限りでは、コナトゥスという概念そのものの中に、生命の有無による差異は含意されていない、ということである。コナトゥスの中に含意されているのは、自己の存在の維持と、これを常に脅かす外部の原因の存在のみである。とするなら、コナトゥスの論理においては、氷片にとっての外部と人間にとっての外部とは、原理上、等価な筈である。それ故、人間がその生命活動を通じて、外部の世界から食物を栄養源として摂取し、これを消化・吸収することによって、いわば外



部世界の一部を自己に同化することがあるとしても、それは、恰も一個の氷片が冷凍室の中で、いわばマイナスの熱エネルギーを、絶えず外部から吸収し続けることによって、氷片としての自己の存在を維持し続けているのと、同じことなのである。なるほど、一個の氷片が冷凍室の中で、己の「栄養」としてマイナスの熱を吸収すると語るとは、単なるレトリック、良くて精々、一つのメタファーだと反論されるかも知れない。しかし、それならば逆に、人間が彼にとっては僥倖な外部世界から、自己の存在維持のために、ある種の「熱量(カロリー)」を吸収すると語るともまた、一つのメタファーとすべきなのであろうか。外部との熱交換ないしエネルギー代謝という観点から見る限り、氷片と人間の間には、我々が予想する程の距離は、実のところ存在していないのかも知れないのである。

それでは、一個の人間のコナトゥスも、我々が先に見て来た氷片のコナトゥスと、全く同様に語ることが出来るのであろうか。この問いに対して、ひと先ず「然り」と答えてみることにしよう。すると直ちに、我々は一個の人間のコナトゥスを、次のように語ることになるであろう。即ち、人間のコナトゥスは、その人間が正に人間であり続ける限りにおいて、そうした一個の「人間」としての「自己の存在に固執しようと努める能力ないし努力」であると。一見したところ、この点に何ら疑念がないと思えるのは、誕生・成長・老化・死亡という人間の一生を形作る変化過程の中で、己のコナトゥスによって維持されているのは、正に彼が常に「人間」であり続けるという事態、言い換えれば、「人間」という彼の形相的本質だと考えられるからである。一生の中で、人間は様々な技能・技量を獲得し、また喪失して行く。そうした変化を、スピノザに倣って、一般的に「完全性」の獲得・喪失と見做すならば、スピノザはその内実を活動能力の増減と捉える。その際、スピノザは、完全性の獲得・喪失が、形相的な変化を意味するものではないことに、我々の注意を喚起している。もし、一個の人間がその人生において、形相的な変化を被るとしたなら、彼はその時点で最早、人間であることを止めてしまうことになるだろう。その限りにおいて、一個の人間としての彼のコナトゥスもまた、失われたと考えられるのである。

そして、重要なのは、この点に関する限り、氷片のコナトゥスも人間のコナトゥスも、同様に語り得ることなのである。一個の氷片にとって、その形状や大きさは氷片の本性である「水であること(水性)」に対しては、単なる偶有性に過ぎず、従ってそれらの変化は当の氷片が氷片であることを、些か

も妨げるものではない。それ故、氷片のコナトウスを、そうした変化過程の最中であって、なお氷片が氷片であり続けることを支えている、一つの〈力〉と見做し得たのである。丁度これと同様に、一個の人間においてもまた、その体格や大きさ、様々な技能・技量といったものは、彼が一個の人間であるという観点から見れば、単なる偶有性に過ぎず、従ってそうした面での変化、いわば人生における発育・成長・成熟・老化といった変化の最中であって、なお彼が一個の人間たり得ているとするなら、これを支えている〈力〉こそが、彼のコナトウスなのであると、我々は見做し得るのである。

しかし、果たして人間のコナトウスは、そのようなものに尽きるのであろうか。と言うのも、先に述べたように、個物のコナトウスとは、そのものを正にそのものたらしめているもの、いわばその個物にとっての「個体化の原理」であると考え得るなら、一個の人間である私のコナトウスは、単に私が一個の人間であることを維持する〈力〉であるに留まらず、さらには私が正に「この私」であることを維持する〈力〉でもある、ということになるのではないか—— そうとも考えられるからである。「私が正にこの私である」とは、特定の個人としての私の「自己同一性」の謂いである。その際、問題になっているのは、種として見られた人間の形相的本質、即ち、人間性・人格性といったものの維持ではなく、むしろ、個としての「私」という人間の個体的本質、即ち、私が私であること、私の個性の維持である。一個の人間である私が、人生という変化過程においてなお、常に同一の「私」であり続けるという事態の中にこそ、我々は一個の人間のコナトウス、即ち、私のコナトウスの働きを見出し得るように思われる。と言うのも、私が私の人生において、「人間」という形相的本質を失うことなく、最早、私が「私」ではなくなってしまうことの原理的可能性を、恐らくはスピノザも否定しないであろうからである。我々が日常言語において、「彼はまるで人間が変わってしまったみたいだ」と語る時、ここに表現されている「人間」とは、言うまでもなく、人間性一般の謂いではなく、個体的本質の担い手である「個性」、彼の「彼性」、彼が正しく「彼であること」、なのである。

このように見て来ると、一般に「人間が変わる」というのは、人間が人間でなくなることであるよりは、むしろ私が私でなくなること、彼が彼でなくなること、と理解されているように思われる。従って、逆言すれば、一個の人間のコナトウスを考える際、我々はこれを、一個の氷片が氷片であり続けることと同様に、一個の人間が人間であり続けようと努める〈力〉としてではなく、む

しろ私が私であり続けようと努める〈力〉として、理解すべきなのではないか。もし、そのように言ってよいとするなら、氷片と人間に関するこの差異、あるいは、種としての人間と個としての人間の差異を、我々はどのように理解すればよいのだろうか。

この問いに答えるために、我々が前節で氷と水について見て来た論理を、ここで再び、援用することが出来るであろう。実際、我々は一箇の人間を、これを捉える我々自身の観点に応じて、様々に記述することが出来る。それは、名前をこれこれと言う、私のよく識っている一人の男である。それは、一人の人間である。それは、一箇の動物である。それは、一箇の生物である。それは、無数のタンパク質から構成された一箇の有機体である、等々。このように考えると、一箇の人間のコナトゥスというのも、様態である限りの人間存在を如何なる位相において理解するかに応じて、言い換えれば、その本質をどのようなものと見做すかに応じて、様々に捉え直すことが出来るもの、とすべきなのではないか。

もしそうだとするなら、このことはスピノザにおけるコナトゥス概念の理解にとって、決定的な方向性を示唆することになるように、私には思われる。と言うのも、先の解釈に従えば、スピノザの所謂個物のコナトゥスとは、当の個物に内在するものとして、一義的に特定し得るような実在的な性質のことでなく、却って、当の個物の中に重層的に読み取ることが可能な存在の位相に応じて、その都度、個物の中に現れて来る変幻自在な〈力〉の現象である、かに思われるからである。一箇の人間のコナトゥスは、私が私であり続ける所以の〈力〉としては私のコナトゥスであり、と同時にまた、私がいわば生物学的に人間であり続ける所以の〈力〉としては、文字通り、一箇の人間のコナトゥスなのである。そして、この二つのコナトゥスは、私という一箇の人間の中に、重層的に重なり合っているのだろう。否、「二つのコナトゥス」という表現をもって、事態をそのように実在的に語ることは、misleadingである。むしろ、我々が考え得る実在的な〈力〉とは、唯一、神の無限な〈力〉のみである、と言うべきだからである。そうした神の無限な能力の様態的表現に過ぎない個物のコナトゥスとは、即ち、その個物に変状したと見られる限りでの神の能力に他ならないが、その際、一箇の人間のコナトゥスは、一箇の人間に変状したと見られる限りでの神の能力の現象に過ぎず、私のコナトゥスは、私に変状したと見られる限りでの神の能力の現象に過ぎないのである。様態的存在者におけるコナトゥスの意味を我々が理解しようとする時、我々が先ずもって忘れては

ならないのは、正に様態が様態であるということの意味なのである。

では、我々は何故、氷片について、その個体的本質を語らないのか。何故、眼前にある正に「この氷片」、恐らくは世界の中に唯一つしか存在していない「この氷片」のコナトウスを、問題にしないのか。確かに、我々は、この氷片が「この氷片」でなくなる瞬間というものを知らない。この氷片の個体的本質について、語るべき言葉を持ち合わせていないように思われる。しかし、その否定性は、原理的なものと言うより、むしろ現実的なもののように思われる。即ち、我々との関係において、ある特定の氷片の個別性が問題になるような場面を、想像することでさえ、実際には、困難なのではないか。それ故、我々人間の言語が、氷片の個体的本質を語る表現を持たないとしても、由なきこととは言えないのである。

一個の氷片を目前にして、物理学者は、外部との熱エネルギー交換を通じて、物質としての水 ( $H_2O$  分子の集合体) が如何なる条件の下で、如何なる様相を現出するかという問題の具体例を、そこに見出すかも知れない。その際、彼の前に存在し続けている対象の、その現実的存在を支えているのは、物質としての水のコナトウスである。同様に、発熱に苦しむ我が子を見守る母親にとって、眼前の一個の氷片は、正に氷片であることにおいて存在しているのである。一個の人間についても、また然りである。医者や倫理学者が問題にするのは、脳死状態にある一個の人間の、正に人間としての存在であるが、しかし同時に、その患者の家族にとって問題なのは、恐らくは、父でありあるいは兄である患者その人の、かけがえのない存在であろう。こうして我々は、スピノザと共に、様態的存在者の存在の如何なる位相の中にも、個体的な実体性を想定することなく、そのものに変状したと見られる限りでの神を神自身の一様態として捉え、そこに神の無限な本性・無限な能力の様態的表現を見ることが出来るのである。それこそが、正しく様態のコナトウスに他ならない。

### 3 コナトウスと活動能力

さて、これまでの考察を通じて、一個の氷片から一個の人間に至るまで、凡そあらゆる様態的存在者に通有的なコナトウスの構造を見て来たわけであるが、そこで確認されたことは、個物が己のコナトウスによって自己の存在を維持するとは、外部世界との現実的な交渉の中で、個物自身が被る様々な変化過程を

貫いて、個物が正に当の個物であり続けるということなのであり、その意味においては、個物のコナトゥスは、当の個物が如何なる存在の位相において捉えられていようと、各々の位相に応じた個物の本質に関わっている、ということであった。この地点から振り返って見る時、本稿の冒頭で提示した第一の問いに関して、我々は次のように考えることが出来るように思われる。即ち、『エチカ』第4部序言で述べられているコナトゥスの汎時間的な同一性は、時間的な変化過程を貫いてコナトゥスが支えている、本質の同一性に重なり合うものとして、理解されるべきであるということである。と言うのも、個物の存在によってこれと共に与えられ、またそれなくしては個物が存在し得ないものを、スピノザは個物の「本質に属する」と規定するのであるが、そうした個物の存在を維持している〈力〉こそがコナトゥスだからである。それ故、個物のコナトゥスは、個物が自己の存在に固執することを通じて、同一の本質を維持し、正に当の個物であり続けること、これら全体を支えることになるのである。畢竟、コナトゥスの汎時間的同一性は、コナトゥスの担い手である個物における、本質の汎時間的同一性に重なり合う、というわけである。スピノザにおいて、「コナトゥスはその物の現実的本質に他ならない」(II S.146)とされるのは、正にこのような意味においてなのである。

しかしながら、コナトゥスを単に個物の本質と等置するだけならば、コナトゥスが個物においてその本質を保持すると言っても、それは単なる同語反復に過ぎないことになる。従って、それだけでは、コナトゥスを語ることの意義は、失われてしまうことになろう。何故なら、コナトゥスを語ることの意味は、個物の存在を〈力の場〉において語ること、個物の存在を神の無限な能力の様態的表現として語ること、に他ならなかったからである。従って、個物におけるコナトゥスの意味を明らかにするためには、コナトゥスが個物の本質に関わり、その限りで、時間的な変化相を貫通する汎時間的な、あるいは没時間的な存在の次元を開示しているとするばかりではなく、同時にまた、個物が一の様態として、己を取り巻く外部世界との間に、絶えざる力動的関係を展開し、そうした〈力の場〉の中で様々な変化を被りながらも、なお自己の存在を維持すべく活動し続けるといった、時間的な変化相における個物の現実的な存在の次元をも、コナトゥスは開示するものであるということ、我々は示さなければならない。それは、如何にして可能であるのか。

周知の通り、スピノザはしばしば、存在と活動を並置する。「存在とは力である」という命題が、スピノザ哲学の根底に横たわっているとすれば、この

〈力〉とは、存在することによって、それが同時に活動すること、某かの結果を自己の内外に産出することでもあるような、そのような〈力〉と見做されなければならない。何故なら、万物を自己の内に産出する神の根元的活動は扱措くとしても、神の能力を部分的に表現するに過ぎない、有限な様態的存在者にとって、自己の外部が存在することは必然的であり、そうした中で自己の存在を維持するためには、外部への某かの働きかけを通じて、常に己の外部を自己のために再構成すべく、努めなければならないからである。様態の本質の中には存在が含まれていない以上、各様態は、与えられた本性の必然性に従った活動を媒介とすることで初めて、自己の存在に固執することが出来るようになるのである。様態においては、活動が本質と存在の媒介概念である。そうだとするならば、一様態である個物の本質は、個物が外部世界との間に取り結ぶ力動的関係の中で、常に活動し、常に変化することによってしか、保持され得ないのではないか。恰も、一個の独樂が、自ら回転し続けることによってしか、自己の姿勢を保持出来ないのと同じように。

このようにして、スピノザにおいては、個物が自己の存在に固執しようと努める〈力〉は、存在する〈力〉と活動する〈力〉の相互関係において、現実化しているように思われる。と言うのも、先に見たように、個物が存在する〈力〉は個物自身の活動によって与えられ、また、個物が活動する〈力〉は個物の現実存在に規定されるのであって、さらには、相互に規定し合うこれら二つの〈力〉の背後に、個物にとっての現実的本質である「自己の存在に固執しようと努める〈力〉」を、我々は想定し得るからである。スピノザの用語法に従えば、コナトゥスは存在力と活動能力の相関構造の中に現実化する、と表現することが出来るように思われる。なるほど、スピノザの語るコナトゥスは〈力〉の概念であるとしても、そこから直ちに、コナトゥスそれ自体が個物と共に変化し、〈力〉としてのその大きさを増減する、と言うことが出来るわけではない。事実、スピノザは、コナトゥスそのものの増減ということ、どこにも語ってはいないのである。それ故、個物におけるコナトゥスの意味を、時間的変化相において理解するためには、個物のコナトゥスが時間相の中にどのように現出しているか、その仕方を捉えなければならないであろう。そして、スピノザの概念体系の中でこれを表現しているものが、先に挙げた「存在力」および「活動能力」であることは、恐らく論を俟たないであろう。コナトゥスから存在力あるいは活動能力へというこの移行を、我々は仮にコナトゥスの〈量化〉と呼ぶことにしよう。つまり、個物が現実的な世界との間に取り結ぶ力動的関

係の中に、自ら〈量化〉することによって、個物のコナトゥスは活動能力として現出する、と考えてみることにしよう。しかし、すると今度は、この〈量化〉という過程そのものが問題になって来る。言い換えれば、コナトゥスと存在力ないし活動能力との関係が、改めて問われなければならないのである。

この問いに答えるに当たって、先ず最初に留意しておかなければならないのは、個物のコナトゥスを、個物に内在している実在的な性質と理解すべきではない、ということである。この点は、既に前節で触れたことである。その際に、一様態としての個物は様々な存在の位相が重なり合う場として捉えられ、これに応じて各位相における個物のコナトゥスが考えられたわけであるが、その場合でも、コナトゥスを何か実在的な性質と理解し、個物が存在するその位相毎に、別個に複数のコナトゥスがあると考えるのは、misleading であろうということが述べられた。これと同様に、ここでもまた、個物のコナトゥスと、それが〈量化〉され現実世界の中に出出したと見られる活動能力との間に、実在的な区別を設定し、いわば二つの別個の〈力〉が個物の中に内在すると考えるのは、明らかに misleading であろう。むしろ、コナトゥスと活動能力は一つの同じ〈力〉の別様の現れ、あるいは、それらの担い手である個物の二つの存在次元への射影、であると理解すべきなのである。

勿論、コナトゥスと活動能力が二つの別個の〈力〉として実在的に区別され得ないからと言って、そのことが直ちに、コナトゥスの実在性を否定することにはならない。否、我々は何もコナトゥスの実在性を否定しようというのではない。我々はただ、コナトゥスを個物の中に内在するある特定の実在的性質のように、考えることを否定しているのである。それは、コナトゥスの実在性を、物の実在性へと還元することに、他ならないからである。スピノザにおいて、物の実在性を指し示すのは、「完全性」という概念である。そして、この完全性の獲得・喪失ということで、スピノザが意味しているのが、正に存在力ないし活動能力の増減ということであってみれば、個物の活動能力を、恰も自動車のタンクに蓄えられているガソリンのように、個物に内在する性質と捉えることは、事態を完全に転倒させて理解することになるだろう。何故なら、それは個物の実在性の徴憑である筈の〈力〉の概念を、逆に、個物の中に何か特定の実在的性質を表象することによって、理解しようとすることになるからである。

以上のように、コナトゥスと活動能力が、実在的には相互に区別出来ないとするならば、両者は一体、如何なる原理に基づいて、別様に語られることになるのであろうか。この問いに関して、我々は、スピノザの論理の中に繰り返し

用いられている区別、即ち、対象を「それ自体において見る」捉え方と、「他の物との関係において見る」捉え方という区別を、ここに援用することが出来るように思われる。この点は、既に前の論文の中でも触れたことなので、ここでは詳しく繰り返すことはしないが、スピノザがコナトゥスなる概念を提示する際にも、その証明の中で正にこの論理が使用されている、ということは留意すべきであろう。即ち、「我々が、単に物自身だけを眼中に置いて、外部の諸原因を眼中に置かない間は」(II S.145)、我々はその物の中に自己肯定的なコナトゥスの〈力〉しか見出し得ない、と言うのである。これに対して、活動能力の増減ということが語られるのは、その担い手である個物の能動性・受動性との関係においてであるから、活動能力を語る地平が個物相互間の関係性の中にあることは、言うまでもないことであろう。

さて、このような視点に立つ時、我々は、狭義におけるコナトゥスの基本的性格を、活動能力との対比から、次のように捉えることが出来るだろう。

(1) コナトゥスが、それ自体で見られた限りでの個物の中に捉えられる以上、個物のコナトゥスは量的な限定を受けない、ということ。「自己の及ぶ限り」という非実定的な、いわば tautological な規定においてのみ、その〈量〉は語られ得るに過ぎない。コナトゥス概念の中には、「無限定な時間」と共に、「無限定な量」が含まれていると言うべきであろう。

(2) 一の個物の存在から、他の個物との一切の関係を捨象することによって捉えられる個物のコナトゥスは、それ故、力の増減という意味での「変化」や他の個物のコナトゥスとの「比較」といった契機を、概念上、含まないとすべきであろう。変化や比較といったことが可能であるのは、個物相互間の関係性においてでしかない。

以上の分析を通じて得られたコナトゥスの基本的性格、即ち、時間において、また量において無限定、不変的で没関係的な〈力〉という基本的性格が、コナトゥス理解として妥当なものであるとするなら、ここから我々は直ちに、本稿冒頭の二つの問い、『エチカ』第4部序言の最後に語られている二つの同等性の意味を問う問い、に答えることが出来るように思われる。即ち、第一には、個物が存在し始め、現に存在し、こののち存在し続けて行くその全経過において、個物のコナトゥスは「同一の力」であり続けるということ、その意味するところは、コナトゥス概念そのものが、量的な限定・変化をそもそも受け入れないということから明らかである。我々は、個物のコナトゥスを、個物の時間的存在次元における全変化過程を通じて、文字通り「同一の力」として働き続



けるものと解してよいように思われる。第二に、上述の点に関してすべての個物が「同等である」と語られる意味は、同様に、コナトウス概念そのものが、個物間における〈力〉の量的比較を受け入れないということから明らかとなる。即ち、すべての個物が同等であるのは、コナトウスに関する限り、Aの個物よりBの個物の方がより大きなコナトウスを有しているといった陳述が、そもそも成立し得ないからに他ならない。

個物を相互に比較し、そこに〈力〉の差異を持ち込むのは、各々の個物を独立した別個の実在と見做す、我々の抽象的・表象的な世界把握に基づいている。スピノザが、あらゆる個物を様態と見做し、そこに神の無限な能力を「ある一定の仕方では表現する」ものとしてのコナトウスを語るこの意味は、正に我々にそうした世界観の変更を迫るものであった。コナトウスが開示する世界とは、それ故、個物間に如何なる〈力〉の差異も認めない無差別な世界なのである。それは同時に、没価値的な世界であるだろう。何故なら、価値とは、活動能力の増減が我々の中に様々な感情を生み出すことによって、初めてこの世界に齎されるものに他ならないからである。従って、スピノザにおいて、価値成立の構造を解明するためには、コナトウスから活動能力への展開をさらに詳しく考察することが、今後の我々に残された課題となるであろう。